

職業としての芸妓

—新潟の花街を中心に—

10K058 土田 舞歌

はじめに

私は、中学生の頃から始めた習い事である長唄三味線を通して新潟に芸妓がいるということを知った。そこから新潟は京都の祇園・東京の新橋と並び称されるほどの花街を形成していたということを知り興味を持った。新潟の花街については、藤野誠が『新潟の花街 古町芸妓物語』のなかで、繁栄の著しい江戸時代から現在の新潟の花街について様子を記している。そして、“花街”と言うとつきまとう“売春”という点に関しては、小谷野敦の『日本売春史 遊行女婦からソープランドまで』で、自身の体を売るといって生きてきた者達についての歴史の変遷が記してあるし、その他の多くの学者により女性史の視点からも“売春”について書かれているものも多い。

私が注目したいのは、職業としての芸妓という点である。これをテーマとする。先述したように“売春”を職とする先行研究は存在するが、芸妓のように身に付けた技(芸事)を武器とし働いている人達についての言及はない。そんな中、新潟では全国的にも大変珍しく、置屋¹を株式会社化した“柳都振興株式会社”(以下、柳都)が存在する。まさに、職としての芸妓が成立している場である。そこで本論では職業婦人としての新潟の芸妓を取り上げて考察したい。それは新潟の花街が繁栄し、職業としての芸妓が活動する場所と時代があったからである。それらを歴史的に見ていくと同時に現代へと移り、新潟の花街において芸妓たちが今後どのように機能していくか、また新潟全体に与える影響はあるのかを考察していきたい。

第一章 新潟の花街と芸妓(遊女)の歴史

ここでは、新潟の花街の歴史の変遷をみていく。

1、名称

まず、ここで扱う名称について定義する。遊女(芸妓)には名称が多数ある。地方によっても多数の呼び方があると考えられるが、新潟でも江戸時代より、遊女・歌舞伎遊女・娼妓・芸妓など多くの名称が用いられていた。現在も新潟(古町)で芸妓として活躍している扇弥さんは、「新潟では芸妓という呼び名で正解。芸者とも言う。」とおっしゃっている。そのため本稿では、時代やその背景により名称をひとつに固定するのではなく使い分けていくこととする。

2、江戸時代の新潟の花街と芸妓

新潟町の遊女について述べられた一番古い文献は、貞享5年(1688)に京都で出版された『諸国色里案内』²である。この書の中で新潟は、「にいがた、なるほどゆたかなるミなどにて、小うた、しやみせんあり。しゆらひ(集礼)百文、三百文までなり」とあり、³遠く京都で制作された色里案内に「にいがた」の名が通るほど全国的に新潟の花街は知られていた。これは寛文16年(1672)、川村瑞賢が幕府の命により西回り航路⁴を開いたことにより新潟湊がその寄港地となり、出入りする船も大変多く大いに栄えることとなったため、新潟の花街の名声も「口づて」で各地へと広まっていったのではないかと考える。さらに、こ

の『諸国色里案内』がまとめられた貞享5年は、9月30日より元禄元年に変わる。ここでいよいよ新潟湊が最大の繁昌を誇る元禄時代を迎えるのである。元禄10年(1697)の新潟湊における商品の取扱高は実に46万2000両に上ったという。藤野氏が、「湊の繁栄は当然色里の殷賑をもたらすに違いない。と思っているが、元禄当時の新潟町における遊女の様子を書いた文献や資料は、全く見当たらない」⁵と述べるように、当時の新潟の花街と新潟湊についての資料はないに等しい。しかし、旅籠の存在は新潟のように栄えた湊にも置かれていたであろうし、そこで船乗りたちを相手としていた遊女や飯盛女たちがいたことも想像できる。

江戸時代中ごろまで、数名の遊女を抱えた数件の遊女屋が集まり、新潟で最初の花街を作ったところを“中道”と呼んだ。中道が古町三番町西側に定着してからの新潟町が巡見使から尋ねられた時に備えた回答案によると、宝暦11年(1761)「遊女屋七軒、遊女数四、五十人」さらに寛政元年(1789)「遊女屋一数年前は十軒余、只今は五軒、遊女四、五十人」とあり、当時の様子を知ることができる。宝暦期以前までは、古町神明町の中道(先に述べた古町三番町西側に定着する以前)が最も栄えていたが、寛政期を迎えると安い花代で招きに応ずる遊女が寺町二の町(西堀前通五番町)及び五、六の町(同八、九番町)に現れ、格式高い中道と共に新潟の花街を形成した。次第に中道と寺町通二の町の花街は衰退し、これと同時に古町通二の町(古町通五番町)と古町通三の町(同六番町)に花街は延びていった。⁶このように、江戸時代の新潟の花街は、複雑に絡みながら広がりを見せつつも衰退し、また繁栄し拡大したりしながら次第に土地へ定着した。

ここで、文政2年(1819)刊行の新潟最初の花街案内書ともいわれる『新潟細見』⁷を元に当時の新潟花街の概観を掴みたい。

「新潟細見」の町名	現在の町名	娼家数(軒)	娼婦数(人)
古二之町	古町通5番町	21	62○
寺町二之町	西堀前通5番町	2	4△
古三之町	古町通6番町	13	32○
古五之町	古町通8番町	27	40○
寺町五之町	西堀前通8番町	10	31△
古六之町	古町通9番町	25	50○
寺町六之町	西堀前通9番町	17	41△
古鍛冶町	古町通10番町	9	18○
古鍛冶町寺町	西堀前通10番町	3	4
棚下付近	古町通12番町付近	22	25●
下町	横七番町通付近	5	157●
しま	南・北毘沙門付近	22	145□
計		176	609

(資料1 文政2年(1819)『新潟細見』から作成 藤野誠『新潟の花街 古町芸妓物語』より引用)

- ・古町通(○)…塗物の町である四の町(古町通七番町)を除き、二の町～六の町、古鍛冶町(古町通五番町～十番町)までに95軒の娼家が一線に並び「古町花街」を形成している。娼婦数も202人と最も多く新潟最大の花街である。
- ・寺町通(△)…後に脱奔小路として有名になる寺町二の町(西堀通五番町)にはまだ2軒。寺町三、四の町には1軒もないが、寺町五、六の町と古鍛冶町まで寺町の三町は30軒が一線に並び「寺町花街」を形成している。娼婦数は76人の中規模の花街である。
- ・下町(●)…熊谷小路近くから橋下新田町近くにかけて、27軒が一団の「下町花街」を形成してい

る。娼婦数は182人と大きな花街である。(明治期には熊谷小路の北側に、新潟中の貸座敷が統合され「新潟遊郭」が形成される)

・しま(嶋)(口)…信濃川の川辺の毘沙門社門前で、対岸の沼垂からの渡し船が着く地であり、22軒が「嶋の花街」を形成している。娼婦数は145人と大きな花街である⁸。

資料1から見てとれるように、江戸時代文政2年(1819)の新潟の花街は、古町・寺町・下町・嶋の4か所から形成されている。大規模な広がりを見せると同時に娼婦数も多いことから新潟の花街の繁栄ぶりが伺える。これは天保期・明治期の花街の原形となった。

『新潟細見』と同時代に刊行された洒落本に『新かた後の月見』がある。この中の「白山祭祀傾城宮参り之図」では、一年最高のハレの日である3月18日⁹に善美を尽くした遊女たちに触れた箇所があり、古町の花街の繁盛を見ることができる。¹⁰またこの本の序文には「当地の名物は八百八後家¹¹と世にいふらし他の国までしらすはなし¹²とあり、全国に出回ったこの本は、新潟といえば「八百八後家」を連想させるきっかけとなった。後に十返舎一九の『東海道中膝栗毛』『金草鞋』にも「八百八後家」は出てくる¹³。天保14年(1843)には、初代奉行として川村修就が着任した。この当時の新潟町は、娼婦たちの稼業形態が多種多様であることや、娼家と町家が入り交じっていることが各所にあることから、風紀を正すこととしての花街の改革に着手が始まった。

このような花街の改革が始まる一方で、寺門静軒による『新潟富史』¹⁴や紀奥之による『越後土産』の「新潟妓楼美人鑑」の項¹⁵では、当時の有名芸妓や美人芸妓の名を載せ短評している芸妓の評判本のようなものが出始めており、全国的に芸妓の人気があったことが伺える。江戸時代における新潟の花街は書物にも影響を与えるほど名を持っていたことがわかる。その背景には、新潟湊の繁栄が切っても切り離せない。新潟湊から名声が船に乗り、旅の人づてにも全国へと広がっていった。

3、明治時代の新潟の花街と芸妓

明治38年(1905)に「東北日報」紙上で連載された「新潟遊女考」に次の一文がある。「次に、土俗の呼んで、女芸者と称するものあり、その名は、彼の、芸を売りて色を售らざる、町芸者に似たりと雖も、其実は、管弦を弄して酒間を斡旋し、兼て、情を販ぐものにして、即ち、色芸兼売の歌舞遊女なり、(略)」¹⁶

明治時代は容姿・芸事・品格と三拍子そろった美妓や名妓が誕生した時代であった。

ここで、明治時代の貸座敷・娼妓・芸妓数の推移を資料2にてみていく。

年	貸座敷(軒)	娼妓(人)	芸妓(人)
明治22	113	232	128
23	106	272	145
25	102	325	144
27	86	371	140
35	110	353	
37	109	398	185
44	100	419	222
大正2	101	516	268

(資料2 明治期の貸座敷・娼妓・芸妓数の推移 藤野誠『新潟の花街 古町芸妓物語』より引用)

「新潟市統計概表」(明治22・23・25・27)「新潟市統計表一斑」(明治35・37)「新潟市統計表」(明治44・大正2)から作成

このように明治時代は娼妓の多い時代である。芸妓の数はそう多くはないが、江戸時代から古町の花街における芸の水準の高さで世に知られた芸どころであった。それを裏付けるように、明治29年（1896）に博文館から売られた「日本周遊双六」¹⁷の新潟のマスには芸妓が描かれていた。新潟県外の人には新潟といえば“越後美人”“新潟芸者”を連想するほど、新潟花街は知られた町であったと考えられる¹⁸。

明治時代の新潟の花街については、規制や花街の位置の変化など変動が多様であった。

明治5年（1872）、政府は“娼妓解放令”¹⁹を布告し、全国的に遊女の解放を命じた。新潟県でもこれに基づき、遊女や芸妓たちを縛っていた年季奉公の証文を提出させ焼却した。²⁰しかし遊女を含めた関係者たちは、生計を理由に稼業の継続を願ったため、県では布達の完全な実施は困難だと判断し規制を緩めたため、遊女の解放はないようなものであった。翌年明治6年（1873）年の花街における項目別数値は次のとおりで、芸妓55人・歌舞遊女114人・遊女273人・貸座敷244軒とされているため、新潟において娼妓解放令が意味をなさなかった²¹。明治7年（1874）3月、新潟県での貸座敷規則・芸妓規則・遊女規則が布達され、²²花街関係の基本となる三規則が出そろった。明治12年（1879）6月には、新潟県より芸妓の貸座敷への同居を禁ずる布達があり、芸妓は遊女と別居することとなった。²³これが、新潟の花街における芸妓置屋の起源であり、その後明治15年（1882）には歌舞伎遊女の区分が廃止となり、廃業しないものは芸妓か娼妓のどちらかになることを迫られた。²⁴

明治12年（1879）2月、『新潟花かがみ』二巻が出版された。²⁵これは古町美技25名を錦絵刷りにした新潟花街最初の芸妓ガイドブックである。これは休止しつつも昭和まで何度も出版され、『新潟花かがみ』はそのはしりであった。

（資料3 『新潟花かがみ』より うるしや安の錦絵 三世広重 藤野誠『新潟の花街 古町芸妓物語』p.4）

明治13年（1880）3月、「貸座敷及娼妓取締規則」が制定され、これまでの“遊女”の名称は廃され、以後“娼妓”と呼ぶようになった。これまでは、貸座敷や娼妓に関することは戸長や用掛の管理下とされていたが、この規則により貸座敷の認許・賦金上納・娼妓の契約・居住・検梅など細部にわたり警察が管理統制することが改められた。ここに、新潟県における公娼制度が確立された。²⁶

明治21年（1888）2月24日、「貸座敷及娼妓取締規則」が改定され、新潟区の貸座敷・娼妓の営業許可区域は、・古町通五～九番町・西堀前通五～九番町・東堀通十三番町・本町十三、十四番町・南、北毘沙門町と定められた。

明治時代の新潟の花街は、明治21年（1888）²⁷・23年（1890）²⁸・26年（1893）²⁹・31年（1898）³⁰と立て続けて火事が起きたため、様変わりをした。一度目の火事をきっかけに、かねてから新潟町に散在し



ている貸座敷を北辺の砂丘地にまとめようと考えていた県は、これを好機として遊郭統合を開始した。これが、“新潟遊郭”の始まりである。³¹そして、二度目、三度目の火事を経て明治31年（1898）、

“本町十四番町”“常盤町”の二本柱を主とし、芸者町・無娼妓貸座敷の多い遊郭として知られた“寄附町”、四ツ家町一丁目総称“新遊郭”の4つの遊郭がまとめて“新潟遊郭”と総称されることとなった。³²また、これら火事による遊郭統合の余波で、東堀に挟まれた古町通八、九番町を中軸とする一面に新たに芸妓だけの“古町花柳界”が誕生したのもこの時期である。さらに、自由廃業が認めら

れるようになったのも明治時代である。その先駆けは、明治33年

（1900）に函館の娼妓である坂井フクの廃業が大審院判決で認められたことであった。³³新潟でも同年、33人の娼妓の廃業があった。

4、大正時代の新潟の花街と芸妓

大正は15年と短い時代であったが、芸どころと謳われた所以とも言える出来事が多い。大正3年（1914）4月1日、新潟市と対岸の沼垂町の合併により従来の古町花街と下町花街に加え沼垂花街³⁴が加わり、新潟市の花街は三花街となった。³⁵そんな沼垂花街の芸事指導は、明治期から大正期の古町花街の踊りをリードしてきた市川登根が晩年の明治41年（1908）から死去の大正5年（1916）まで熱心に指導し、小さな花街ではあるが古町花街にとって軽視できない存在だった。沼垂花街からは、「島の娘」や「東京音頭」で有名な小唄勝太郎を世に送り出している。市川流市川登根と市山流四代目家元市山七十世の両師匠が相次いで逝去したのも大正時代であった。この二人の師匠は、共に明治初期から芸妓たちの踊りを厳しく指導し、中央にも名の通った大師匠であり指導力は抜群だった。古町花街の芸妓はすべてどちらかの師匠について踊りを習っており、二人の師匠の逝去は花街関係者にとって大きな悲しみであり痛手であった。両師匠の死後の大正時代後半の古町花街の舞踊指導は、藤間小藤（市川登根の孫）と五代目市山七十世（四代目家元市山七十世の孫）の若師匠に委ねられた。³⁶大正9（1920）年9月には、藤間静枝が桐蔭会第7回新潟公演を新潟劇場で開催³⁷、大正15年（1926）5月10日から12日までの三日間、新潟市において全国料理飲食店業同盟会第26回大会が開催された³⁸。

大正初期の新潟花街を揺るがしたのは大正4年（1915）に行われた「新潟十美人」投票であった。これは新潟新聞社が、一ヶ月間新聞に投票用紙を付け、読者の投票により新潟の花街300人の芸妓の中から「十人の美女」を選定する企画であった。上位十人の美技については、等身大の肖像画が作成され、映画館大竹座に展示された。第一位の芸妓の得票数は10万票を越えていることから市民の芸妓たちへの関心の高さが伺える。

5、昭和時代の新潟の花街と芸妓

昭和初期の新潟には、古町花街・北廓（下町）花街・沼垂花街の三花街があった。資料4は、昭和初期における「三花街の芸妓置屋数・芸妓数」である。当時の新潟の新聞「東北時報」が「玉芳紀」と名付けて紹介した置屋別芸妓一覧（置屋名・芸妓の芸名と本名・年齢）に基づいて作られた。

	昭和3年		昭和5年		昭和6年		昭和7年	
	置屋数 (軒)	芸妓数 (人)	置屋数	芸妓数	置屋数	芸妓数	置屋数	芸妓数
古町花街	133	298	140	293	146	314	132	287
北廓	24	35	24	37	20	32	18	25
沼垂花街	44	81	37	64	35	64	23	43
計	201	414	201	394	201	410	173	355

（資料4 「東北時報」の「玉芳紀」から作成 藤野誠『新潟の花街 古町芸妓物語』より引用）

	昭和3年	昭和4年	昭和6年	昭和7年	昭和9年
10代（14歳～19歳）	90人	102人	100人	112人	75人
20代（20歳～29歳）	159人	135人	164人	128人	114人
30代（30歳～39歳）	29人	36人	30人	30人	37人
40代（40歳～49歳）	18人	19人	20人	17人	17人

50代 (50歳～59歳)	2人	1人	0人	0人	4人
合計	298人	293人	314人	287人	247人

(資料5 「東北時報」の「玉芳紀」から作成 藤野誠『新潟の花街 古町芸妓物語』より引用)

これを見ると、昭和6年(1931)の古町芸妓数は314名と大変多い。その8割以上は、10代の新米の振袖と20代の若手芸妓で占められている。行形松次良氏は『料亭物語』の中で、「昭和初期の100人くらいの宴会では、芸妓は4、50人もくるという。～中略～ 戦前のこうした宴会は少なくとも2時間半はたっぷりかけていたとのこと。10代20代の若手芸妓が、つきっきりでサービスをするので、酔って歌って踊って陽気に騒げば2時間や三時間はあっという間に過ぎて、芸妓のねえさん株の樽叩きがお開きの合図となって、ようやく解散となる」³⁹と語っている。大宴会ともなるとこの人数の芸妓たちが座敷に出向いてゆくのには当たり前であり、豪華絢爛であった。昭和8年(1933)には、日本舞踊のメッカである首都東京に乗り込み、市山研踊会東京公演が東京明治座で行われ、⁴⁰さらに、昭和10年(1935)1月7日から4日間、古町花街の総力を集結して盛大に行われた芸道公演会「舟江をどり(第一回)」が開催された⁴¹。

戦時下の古町花街の様子をここで述べる。日中戦争の始まる一年前の昭和11年(1936)年の芸妓数は、「東北時報」の「玉芳紀」によると207名である⁴²。昭和初期に300名を越したその数も時局の緊迫のためか減少した。さらに日中戦争の泥沼化が進んだ昭和15(1940)年、県当局の花街に対する取り締まりは強化され、料屋・待合などは午後11時を限度として以後は客を置いてはならないこととなり、花街関係者にとっては相当な痛手であった⁴³。昭和16年(1941)12月8日、日本は日米交渉を打ち切り勝算のないまま太平洋戦争へ突入した。日本中の生活が困窮してゆくなかでも古町花街はたくましく、この頃の芸妓数は240名ほどであった。昭和18年(1943)、戦局がいっそう緊迫してゆくと市民の服装の変化とともに、古町芸妓もお座敷へ行く時は万一空襲があっても身軽に行動できるようにモンペの携行が常態化した⁴⁴。昭和19年(1944)、閣議で決定された「決戦非常措置要項」に基づき、同年3月4日「高級亭楽停止二関スル具体体策要項」が発表された。これにより、芸妓や女給・女中は職を失い、芸妓をはじめとする女子たちは、女子挺身隊としてさまざまな作業所へ振り分けられた。⁴⁵昭和20年(1945)8月15日、戦争が突如終結し、米軍の新潟市への進駐は昭和20年(1945)9月24日から始まった。新潟中央警察署の軽部要作署長の呼びかけで、古町芸妓20名ほどが古町芸妓に戻り進駐軍をもてなしてほしいと依頼を受けた。この頃、古町芸妓は130名ほどであったとされる。戦後間もないころは、料亭も芸妓たちにとっても酒・米・野菜ほとんどが配給統制であり営業ままならない日々であった。昭和24年(1949)4月1日、野菜の配給統制が解除され、同年11月30日、進駐軍は新潟を引き揚げた。そして、年を追って統制も緩やかとなり戦後の古町の料亭にもようやく通年営業の光が見え始めた⁴⁶。世情が安定を見せ始めた昭和28(1953)年8月、昭和30年代の好景気を目前とし、古町花街の復活を表すかのようなめでたい朱色で彩られた「古町芸妓番付」が発行された⁴⁷。

年代	置屋数(軒)	芸妓数(人)
昭和30年	111	198
昭和33年	112	202
昭和35年	113	202
昭和37年	114	192
昭和38年	119	192

(資料7 「芸妓連名表」を元に作成した昭和30年代の古町花街の芸妓数 藤野誠『新潟の花街 古町芸妓物語』より引用)

昭和20年代は一時芸妓数113人と減少を見せたが、昭和30年代半ばの古町花街は好景気を受け、連日連夜の宴会で大賑わいで、一時は下降線であった芸妓稼業も安定を見せた。⁴⁸昭和35年（1960）4月、古町芸妓202名の顔写真を掲載した古町芸妓ガイドブック『新潟花街』が発行された。これは『風流万千花かがみ』以来35年振りのガイドブックであった。翌年にも『新潟花街』は発行されており芸妓数は192名であった。昭和30年代は、古町芸妓数は常に200名前後であり、変動は少なかったが、昭和40年代に入ると芸妓数は急減する。昭和45年（1970）8月発刊の古町芸妓ガイドブック『ふるまち』では136名（うち振袖⁴⁹6名）であった。昭和43年（1968）には、振袖の希望者がゼロとなった⁵⁰。昭和51年（1976）の古町芸妓数が110名であった。そしてさらに数は減り、昭和61年（1986）には二桁の60名となった。しかも芸妓中最年少は36歳、上は明治生まれが2名残っており、平均年齢53歳と高齢化が進みこのまま放置しておけば、古町芸妓がいなくなってしまう日は目前であった。これに強い焦りを覚えた当時新潟交通の社長である中野進氏は、打開策として「芸妓置屋」の株式会社化を掲げた。これまでの芸妓置屋は、古町はもちろん全国各地でも花柳界に明るい芸妓出身者が女将となり采配を振るわなければうまく機能しないとされていた。そのためこの置屋を株式会社にすること＝OL芸妓が誕生するということが大変な奇策であった⁵¹。

6、考察

新潟の花街は、“芸を売る”という系譜を辿ったという点で、それは時代ごとに使用される名称に現れている。1の江戸時代における資料には、宝暦11年（1761）における中道についての記述には“遊女”、文政2年（1819）における『新潟細見』については“娼婦”とあるようにこの時代での名称は芸も売っているが色を売るということを表に出した印象の強い名称が使用されている。2の明治時代においては、明治5年（1872）の娼妓解放令後の貸座敷における項目別数値で使用されている名称は、芸妓・歌舞伎遊女・遊女であり、この3つに分けられている。さらに明治7年（1874）に新潟の花街における規則の中で、今まで区分のはっきりとしなかった“歌舞伎遊女”が遊女に区分された⁵²。明治13年（1880）3月、「貸座敷及娼妓取締規則」が制定され、これまでの“遊女”の名称は廃され、それに準ずる女性は以後“娼妓”と呼ぶようになった。明治時代相次ぐ火事により、娼妓で形成された“新潟遊郭”と芸妓で形成された“古町花柳界”の二つに花街は分かれた。このころ出版された番付表においても芸妓・娼妓と東西に分かれて番付されている。⁵³娼妓が色を売っていたことはもちろん、芸妓も芸も色もどちらも売っていたことは想像がつく。しかし、芸妓という呼び名に変えて少しでもその裏を隠そうとしたのが規則のでき始めたこの時代であったのではないかと考える。3の大正時代と4の昭和時代に入ると、娼妓や娼婦という呼び名は、新潟の花街の資料では見受けられなくなり、芸妓という呼び名で統一されている。ここで注目したいのは、平山敏雄の『新潟芸妓の世界』の古町芸者と芸事の項に書かれている一文である。そこには、「日本の芸者街は、芸を売ったのと、女を売ったのと、大ざっぱに二つの系譜に分かれる。古町の花街は前者の系譜を辿った。それだけに、芸の仕込みはきびしかった」⁵⁴と書かれている。さらに藤村誠も『新潟の花街 古町芸妓物語』において遊郭と花街を完全に分け、最終的に花街における芸妓について述べている。これらのことから新潟の花街が芸を売りにしていたことがわかる。しかし、芸のみを売っていたという記述も、色を売らなくなったことがわかるという記述も存在しない。現役古町芸妓である扇弥さんによると「昭和33年（1958）の売春禁止法完全施行まではそのようなことは確実にあった。芸妓置屋やお料理屋さんの隣近所には必ずと言っていいほど宿泊のできる待合さんがあった。」とおっしゃっている。このことから、新潟の芸妓は芸を第一として売りにし大切にしていたことと、その芸妓という名の裏にはやはり色を売るといふもとの成り立ちからの流れも含んでいたという

ことがわかる。

昭和33年（1958）を境として色を売るということが花街においてなくなったが、新潟の花街における芸妓の数は年々減少した。その背景は多数考えることができるが、景気の上昇において古町の景観の変化が挙げることができる。それまでの需要があった待合⁵⁵がバーやカフェへと姿を変え、芸妓たちの仕事の場が減少していった。さらに、女性の職業選択の幅も明治・大正・昭和と時代を追って一気に広がり、芸妓を選択する女性もまた減少の一途を辿った。第二章では女性の職業としての芸妓を見ていく。

第二章 職業としての芸妓（遊女）の歴史

ここでは、時代の流れる中で、女性たちの職業観の変化の中で、芸妓・遊女の扱われ方に新潟を中心に焦点をあてる。

1、江戸時代の新潟の花街における芸妓

第一章で記述したように、新潟における最初の花街が成立したのは江戸時代中ごろの“中道”における花街である。宝暦6年（1756）に「越後名寄」30巻を著した丸山元純は、当時、新潟で春をひさいでいる女の種類をわけて、中道の遊女・寺町の浮身・旅宿の拘・川岸の川売の4つを挙げている⁵⁶。さらに当時、中道の遊女屋の主人が連名で新潟町奉行に従来からの慣行を破っている寺町通や下町の浮身女や茶屋の主人を取り締まってほしい旨を訴えた願書によると、「古来、中道の遊女はしてもよいが、寺町通りや下町の浮身女には許されない三つの事柄がある。その一は、絹布類など華美な衣装をきること、その二は三味線などの芸事をする事、その三は、禿を連れて日傘をさして歩くことの三つである」⁵⁷とし、売女との格の違いと三味線を弾いたり、芸事をもできる格式の高い遊女としての職業をできるのは中道のみであると述べ、色を売るもの達の中でも稼業形態の差が見受けられる。それだけ遊女は格の高さを売りとしていたのだ。これは吉原や当時の遊郭・その付近に根付いた飯盛女や隠売女と類似する。

また、天保14年（1843）、新潟は天領となり初代奉行として川村修就が着任した。当時の新潟町は、遊女屋に抱えられている遊女の他に、三味線を専らにしながらも売色をする女芸者、素人姿で客を誘う“後家稼”と称する売女など娼婦たちの稼業形態が多様であることや、娼家と町家が入り交じっていることから、風紀を正すためとして花街の改革が着手された。施策としては、「古町通、寺町通二の町から六の町までの娼家は泊茶屋、娼婦は茶汲女と呼ぶ。その他の熊谷小路、毘沙門島の娼家は船宿、娼婦は洗濯女と呼ぶ。なおこれらの地域以外では、いっさい紛らわしい渡世をすることを禁ずる」⁵⁸というもので、娼家の営業区域の限定と地域によって娼家と娼婦の名称を一定にすることの二点であった。弘化元年（1844）九月、修就はこの旨を関係業者に厳達した。この命令を厳守し請証文を差し出したのは関係業者中151軒であった。同時期に修就は、検断（村役人）以下の町役人に「新潟では売女稼業を恥ずかしがらない傾向があるが、こうした悪習を矯正するように。」と町民教化を論じている。しかし、川村修就のこの売春を悪とする儒教的な思想は、売女稼業を恥ずかしがらない江戸時代の新潟町にはそぐわず、町にとって売春は必要悪であったため、規制しつつ許していく手段をとった。

2、明治時代の新潟の花街における芸妓

新潟の花街は、芸妓と娼婦の二分が進んだ時代であった。その決定打となったのは明治13年（1880）に制定された「貸座敷及娼婦取締規則」である（第一章参照）。この公娼制度の成立により、警察が花街の管理統制をすることとなり娼婦たちはこの管理下に置かれることとなり、隔離された新潟遊郭が成立し

た。さらに、芸妓と名のつく女性の売春は事実上禁じられた。依然として娼妓が多く新潟遊郭は栄えていたが、その中の女性たちの売春という職業はやはり（i）に現れるように大変な苦行であった。

一方の芸妓たちは、彼女たちを網羅した公式の芸妓たちのガイドブックが刊行され市民の手に渡ったり、公の活躍の場があるなど、隔離された娼妓たちとは違う職業形態を辿った。もちろん色を売っているということも考えられるが、これら芸妓たちの華やかな資料は多数残っているし、この華やかさを持って芸を売るといふ系譜が現在の新潟の花街へと伝承されていったのである。

3、大正・昭和時代の新潟の花街における芸妓

この時代の新潟の芸妓たちは芸達者がそろっていた。昭和初期に古町花街で芸妓をしていた方の壊旧談に、「低学年のうちから小学校へ通いながら仕込みっ子になって、置屋の掃除手伝いから、姉さん芸者の使い走りのかたわら、真夏の暑い日も真冬の指もかじかむ寒い日も、たゆみない努力を積み重ねて、磨かれただけに腕も確かなわけでした」⁵⁹とあり、江戸時代より全国的にその盛名を謳われ、修行の厳しさや熱心さでも知られていた。特に踊りは明治から大正時代にかけては、市山流・市川流とが花街を二分して技を競い合い、昭和に入ってから両流派の孫たちにより踊りの質は格段に高まり、その自信が昭和8年（1933）の東京明治座へ乗り込んでの市山連の舞台公演の開催や両流派合同しての昭和10年（1935）の「舟江をどり」の開催を実現させたのである。このように、幼いころから稽古に励む芸妓ばかりであった大正・昭和時代の古町花街は、芸達者ぞろいの10代、20代の振り袖、若手芸妓が常時200名前後もいる上に、ほとんどの置屋が住み込みの仕込みっ子を数十名も育てており、この一帯は女の園であった。インタビューをした現役の古町芸妓である扇弥さんによると、自身は内っ子であるから中学を卒業したら家を継ぐために芸妓となることが当たり前で自然なことだと思ひ、幼いころより芸事の稽古に励んでいたという。扇弥さんが中学卒業と同時に半玉としてデビューしたのは昭和36年（1961）であり、この時代の花街周辺の中学校では一クラスに3人位は卒業したら芸妓となる子がいたという。そのため芸妓になる・芸妓として働くことがさほど珍しいことではなかった。もちろん周囲から映画のような世界観で見られたり、影口を言われることもあった。しかし、扇弥さんのように芸妓となる子の多い中学校の卒業式などでは、全員の前で春からデビューする芸妓たちが三味線と踊りを披露することもあったそうだ。そのためこの時代の芸妓の捉えられ方は、普通の職業ではないことは確かだが、新潟という土地に根付いた職であったとみられる。

置屋に属し働く芸妓たちをひとまとめにはできない。先にも“仕込みっ子”と“内っ子”とあったが、住み込みの“仕込みっ子”と、置屋の娘である“内っ子”には違いがあった。インタビューをした扇弥さんは内っ子であり、自身の芸妓としての半生を元にして作成された小説『熱い雪』の中で帰りの遅かった自身の家（置屋）で育った年下の“仕込みっ子”と言い争いとなった。仕込みっ子の多くは借金を背負い仕事をしており、座敷に上がっているだけでは早く借金を返せずに色を売ることになった。芸妓の目線からも良いことだとは思っていないということが昭和の時代において伺える。内っ子はその意味では借金もないため、幾分か仕込みっ子より楽に思えるが、その家の子としての重圧や、他にやりたいことがあっても決まったレールの上を行かねばならないしがらみはあったそうだ。

また時代は前後するが、大正15年（1926）5月10日から12日までの三日間、新潟市で全国料理飲食店業同盟会第26回大会が開催された（第一章参照）。このような公式な場面での芸妓たちの仕事が増えてきた。大正時代から活躍の場がお座敷だけにとどまらない要因は、新潟の芸妓が芸事に秀でていたことが大きなポイントとなっていると思われる。新潟の芸妓は、他の土地の芸妓とは違う扱いと扇弥さんはインタビュー中に幾度か言っていたが、芸事を職とするということを通し、市民権を獲得していった。

4、考察

女性たちの職業は江戸～昭和と多様化を極める中で、遊女・娼妓・芸妓は違う種の職業であった。江戸時代には“奉公”という名のもとで女性たちの働くという活動がスタートしたが、遊女たちにとって年季などはほぼ口約束でしかなかったため、そこで一生を終えることよりほかならなかった。明治時代に入ると、特に新潟では“新潟遊郭”と“新潟花街”とが形成され、芸を売るという系譜をたどることとなった。そこからは資料に現れる名称も娼妓から芸妓へと推移していった。

現在の“柳都振興株式会社”社長である中野進さん（以下、中野社長）によると、芸妓の仕事は座を活かすことだという。新潟では湊が栄えた江戸時代より、経済界・芸妓連・料亭文化が息づいていた。商談が成立すると、料亭での会食に芸妓たちが入り、芸を披露することで座が和み活き活きとし、また次に繋がる手助けを芸妓がしていたのだ。昭和の頃から新潟を中心として事業をしていた中野社長にとっても、芸妓たちは一種の職業的パートナーであった。これがまさに職としての芸妓が新潟に残った背景であろう。

そんな芸妓たちが一気に減少したのが戦後から現在にかけてである。その理由を中野社長は、戦後の土地改革により豪農や豪商と呼ばれた旦那衆たちがいなくなったことだと話している。彼らがいなくなったということは、芸妓たちにとってのパトロンがいなくなったということだ。芸妓たちはもちろん稼ぎもあるが、それ以上に習い事や衣裳にかつらなど競って身につけ、美しくある必要があったため、出ていくお金も多かったのだ。そこに旦那衆たちは手を貸していたのである。新潟の置屋が、小学生くらいの仕込みっ子を何人も抱え、その子たちに芸を仕込み知識を与えて振袖さんとして中学を卒業と同時に送り出すのは旦那衆の支援があったからこそできたのだ。これが途切れたことで置屋が若い芸妓を育てることが困難となり、昭和後期には振袖さんは一人もおらず、芸妓中の最年少は36歳となり古町においての芸妓の職はなくなろうとしていた。それに焦りを感じ、現在に至る“柳都振興株式会社”が置屋初の株式会社として設立されたのである。

芸妓とは、元は遊女として色を売りながら生活をしていた女性たちである。これは変えることのできない事実だ。しかし芸を磨きあげることで彼女たちが兼ね備えた才色兼備は、財界や経済界の仲介役として裏でその土地を回してきた。それはまた新潟だけにとどまらず、どこでも必要不可欠の職だったのだ。現在はこのような場がもたれる機会も減っている。そんな状況でも芸妓という職を残そうとした理由を次章で述べてゆく。

第三章 現在の新潟の花街と芸妓

ここからは、現在の新潟の花街の中心“柳都振興株式会社”について述べる。

1、柳都振興株式会社設立について

昭和62年（1987）12月9日、地元有力企業約80社が出資して、全国初の置屋株式会社および芸妓養成・派遣会社である“柳都振興株式会社”（以下、柳都）は設立された。この設立に関わったのが、中野社長と扇弥さんである。昭和61年（1986）に古町の芸妓数は60名となり、芸妓中最年少は36歳、上は明治生まれが2名残るのみで、平均年齢53歳と高齢化が進みこのままでは古町芸妓がいなくなってしまう日は目前であった。これに強い焦りを覚えた当時新潟交通の社長である中野進氏が、打開策として「芸妓置屋」の株式会社化を掲げたことが柳都設立のきっかけであった。なぜ柳都を作る必要があったのかと

いう問いに中野社長は、「仮になくなったとして、これが新潟・古町にとっていいことなのかと考えたときに、絶対に必要だとみんなが思っていたからだ。旦那衆がいなくなった今、みんなが旦那となって古町の花街を支えていく必要があった。」と述べた。古くから新潟を影から支えてきた芸妓たちを助けていくのもまた新潟の経済に関わる人としての使命と感じる人が多かったために出資金もすぐに集まったようだ。設立当時、扇弥さんは置屋組合の組合長をしており、自分たち芸妓衆が仕事をしていくためには後継者が必要であったという。置屋の株式会社化に反対する現役の芸妓たちもいたが、危機を感じた出資する企業側と芸妓側とで設立のための理事会が発足された。

昭和63年（1988）1月30日、振袖8人（当日2人欠席）の“お披露目”が盛大に举行された。彼女たちは“柳都さん”と呼ばれた。この一期生10名の前身は、国家公務員・キャンペーンガール・OL・高校を卒業したばかりの人などさまざまであった⁶⁰。そんな彼女たちは着物は成人式で着たきりで、重い日本髪のかつらも被ったことはなく、正座をすれば足もしびれてしまうと前途多難であった。それ故独り立ちまで、お座敷は必ず姐さん芸妓と組まれた。お座敷はマンツーマンの教育場であった。そんな柳都さんたちの古町芸妓仲間入りには越すべきハードルとして、現役の古町芸妓である姐さんたちがOL芸妓の彼女たちを後継者として認めてくれるかという問題があった⁶¹。扇弥さんは「柳都の子たちは、自分たちのように小さいころから芸事をしてきた子なんてほとんどいないのだから、一番に覚えなくてはいけない踊りでも最初は体操を見ているようでお客さんからも2、3年は見ていて肩が凝るなんて言われた。だから、柳都のできた初めのうちはしょっちゅういろんな事を教えに行ったり、悩みを聞いたりなんかもした。」と話している。扇弥さんは柳都設立に深く関わっていたため、柳都さんたちへの理解も強かったが、最初反対をしていた姐さん芸妓たちも、たとえOL芸妓とはいえ女性の職業として一般的ではない芸妓という道を選択した柳都さんの慣れないお座敷をがんばる姿に忘れていた若き日を重ね合わせ、彼女たちに古町芸妓の明日を託すしかないという思いと理解を深くしていったのではないかと考えられる。そうでなければ、現在に至るまで柳都が残っていくことは不可能であっただろう。これについて現在の柳都振興株式会社支配人で、自身も柳都さんの3期生であった棚橋幸さんが、「やはり、新潟のように花柳界に何も知らない若い子を受け入れてくれたことは大変珍しいことで、お姐さん方やお料理屋さんには本当にありがたい」と述べている。新潟の昔からの置屋と株式会社の置屋とが一緒に花街を作り上げることは珍しいことであった。

2、現在の柳都振興株式会社

現在、柳都振興株式会社は設立から26年目を迎え、6名の振袖さん⁶²と3名の留袖さん⁶³の計9名が所属している。そこに昔からのお姐さん達が約15名入り、古町花街を形成している。そんな現在の柳都・古町花街について、中野社長や、お姐さん芸妓である扇弥さん、現在柳都さんとして花街という現場で働いている芸妓のあおいさん（留袖）と初音さん（振袖）・現場での事務方の棚橋さん・会社としての事務方の一森さんという現在古町花街に関わる方へのフィールドワークを通し、良い点と悪い点の双方が浮かんできた。

現在の柳都の良い点は、伝統と諸芸の質の高さにより“新潟の誇る伝統文化”としての位置付けが確立してきたことである。新聞や雑誌やテレビなどのメディアに取り上げられることはもちろん、行政のパンフレットや新潟まつりのポスターを飾るなどの活躍の場が増え、その知名度が上がってきている。柳都の事務方の一森さんによると、設立当初は“芸妓”として色眼鏡で見られることが多く、メディアに取り上げられることも少なかったため、何をしているのかわからない会社とそこに勤める芸妓とみなされていたという。近年では、“新潟の顔”としてG8労働大臣会合を始め、県内外だけでなく海外から新潟へいら

したお客様をもてなすにもなくてはならない存在となっている。公表されていないが、昨年柳都さんを引退された春花さんに特別市民栄誉賞を贈りたいという申し出が市長から直々にあったとインタビューの中で一森さんからお聞きした。春花さんご本人の希望で辞退したそうだが、これは芸妓という職業が認知をされた結果だと考える。

現在の新潟になくてはならない柳都だが、深刻な地方不足が現在の問題点である。地方とは、唄や三味線などを演奏する芸妓のことである。現在この役割を担っているのはお姐さん芸妓たちだが、いつかは頼ることができない時が来ることは目に見えている。将来の地方育成のために東京などからも師匠を呼び稽古を重ねている。さらに、一森さんから今後の柳都の会社としての課題をお聞きした。第一の課題として柳都の中から振袖の次のステップである“一本（地方）⁶⁴”を出すことである。将来的には、振袖、留袖、一本（地方）の3パターンで構成したピラミッドを形成し、お座敷を柳都だけで賄えるようになってはならないのだ。これが可能になって初めて柳都が株式会社としての置屋として成立すると考える。そのために



(資料8 2013年度 新潟まつりポスター)

は柳都さんたちのモチベーションを保ち・上げ続ける必要がある。現在の柳都さんの中に一期生が残っていないように、引退される方が多いことも、自身で切り盛りをしながら芸妓を続けるお姐さんたちと違い、会社に雇用される立場から辞めることが簡単になっている。しかし芸妓という職業に定年は存在せず、お姐さんたちのように生涯続けることが可能な職業でもある。これを現在の柳都さんたちへうまく浸透させていくことが、置屋の株式会社としての役割と芸妓という職業を新潟において残していく手段なのである。

一方で花街と言う現場で働く柳都さんたちは、柳都和古町花街についてどのような考えをもっているのだろうか。インタビューをした柳都さん二人が口をそろえていったことは、花街に関わる方全員が柳都さんたちを“うちの子”としてみてくれている点が一番良い点だということだ。柳都さんの誰が置屋に関係なく、全員がひとつの会社に所属しているため、全員が古町の子として分け隔てなくかわいがってもらえることに柳都さんたちはありがたさを感じているという。この花街の仲の良さが、古町においての柳都が成功し存続している所以のひとつともいえるであろう。しかし、一つの花街として成立していることが裏目に出ることもあると留袖のあおいさんは言う。その理由はお座敷の融通が利かないという点だ。多忙を極めたとしても一派閥しかない古町の花街では柳都のみで仕事を回していくほかはない。さらに一派閥だけなので競争相手がなく意識が低くなる。これらを踏まえ柳都さんの二人は、柳都の中でのピラミッドの形成が大切になると述べている。これは一森さんのいう会社としての考え方も合致するが、そこに+αして留袖のあおいさんは、ピラミッドは一つでなくてもよいのではないかと考えを示していた。一つの花街としての古町の柳都に、同じ形態のピラミッドがもう一つ二つと増えれば、活躍の場が広がるであろうし、切磋琢磨し職業としての芸妓たちの質も向上していだろう。だが、これらを実現させるためにはなによりも柳都さんとして働く新しい人と続けていく人の双方を増やし続けなくてははいけない。

今の世の中で芸妓という職業が表立って成立しているのは、業界がオープンになったことだと花街とい

う現場で事務方をされている棚橋さんは言う。今までは昔のような夜のイメージとみられることが多く、さらに芸妓とは上流階級の人しか扱うことのできないようなイメージもあった。しかし現在は新潟の顔となり芸妓たちの姿はさまざまな場面で見ることができるし、個人の婚礼行事など、昔のお座敷中心の仕事と違い、仕事内容はかなり変化している。

3、考察

ここまで現在の新潟花街の中心となる柳都振興株式会社について記述してきたが、その成立の目標は、「古町花街の後継者を育成し、古町花街の伝統を守る」⁶⁵というものであった。柳都の設立に携わった現役の芸妓である扇弥さんは、現在の柳都さんたちについて「今、外から柳都の子たちを見て、もっとできることのある集団なのになあ、と感じることが多い。」と述べている。これは古町の伝統として柳都さんたちが育ってきており、これからは次のステップへと進み職業の幅を広げていってほしいという思いから来た言葉であると考えられる。柳都さんたちも「芸妓は可能性のある職業なのだと実際になってみてわかった。」と述べている。芸妓という職に就いている双方が、今後の芸妓という職業の在り方について共通の意識を持っていることがインタビューを通してわかった。可能性を無駄にせず、次へのステップを芸妓という職業が踏み出すためにも、この目標に新潟と言う土地に広く根差し、新潟には芸妓という職業選択があるのだということを今一度周知してもらう必要があると言うことが考えられる。

おわりに

現在、柳都振興株式会社へ入社する柳都さんのほとんどが、芸妓という職業に対しての偏見を持たず、憧れであったり、大きな舞台で踊ってみたいという理由で入社していると柳都さんたちから伺った。私自身、職業選択を考えた時、柳都への就職も考えてみたが一步を踏み出せず、自身の選択肢に入れることができなかった。それを事務方である一森さんにお話しした際に「迷いが生じているのであれば選択しないことが妥当だ。」と言われた。それでも今現在のこの時代に芸妓を選択した柳都さんたちは、偏見がないにせよよほどの覚悟が必要だと考える。それは昔と間逆の道でもある。芸妓の生まれである遊女は、弱い者＝最も下層な女性が否応なしにならなくては行けない職業であった。しかし現在はもっとも強い意志を持った女性にのみ与えられる職業へと変貌を遂げたのである。新潟やその地の代表となり、その地を支え発展させていくという心構えと、それに臆することの無い精神力を持ち合わせた女性にしかできない格式高い職業なのである。

注

- 1 芸者や遊女などを抱えていて、求めに応じて茶屋・料亭などに差し向けることを業とする店
- 2 京都島原の案内を中心に全国の主な遊郭・遊女についてまとめた色里案内書
- 3 藤村誠『新潟の花街 古町芸妓物語』 p.22
- 4 江戸時代、日本海沿岸の港と大坂を結ぶ幹線航路。17世紀半ばに開かれ、日本海を西へ航海し、下関から瀬戸内海に入り大坂に達する。
- 5 前掲書3に同上、2011、p.23
- 6 同上、2011、p.24-25
- 7 町別もしくは地域別に娼家名、旅籠名、娼婦（歌者も含む）^{げいしや}名を明示している当時の新潟花街全体を把握するには極めて貴重な資料

-
- 8 前掲書3に同上、2011、p.27~30
 - 9 白山祭礼の行われる日にち
 - 10 同上、2011、p.34
 - 11 遊郭の俗称。「八百八=多くの」「後家=やもめ、独身女」の意があり、私娼の意を持つ。このように呼ぶのは全国的に新潟くらいしか見当たらない。
 - 12 前掲書3に同上、2011、p.35
 - 13 同上、2011、p.35~37
 - 14 同上、2011、p.55 安政5年(1858)から翌年にかけて数カ月新潟に滞在した際の見聞を元に書かれたもの。古町の花街と美技を取り上げ、その華やかさ、美しさは江戸にも劣らないと絶賛している。
 - 15 同上、2011、p.59~60 元治元年(1864)刊行。紀興之は鼓の師をしながら、越後の隅々まで巡歴した会津の人である。『越後土産』は越後の地理・旧跡・人情・風俗などを紹介した小冊子である。
 - 16 風間正太郎『新潟遊女考』p.14
 - 17 明治29年(1896)に、定価25銭で東京の博文館から売り出された双六。全部で31の都市や名所が色絵と短い紹介文付きで登場する。
 - 18 前掲書3に同上、2011、p.67
 - 19 遊女の人身売買の規制などを目的とした太政官布告。
 - 20 前掲書3に同上、2011、p.68
 - 21 同上、2011、p.68 『平成市史 通史編3』を参照したもの。
 - 22 同上、2011、p.69 営業地の限定・鑑札付与・賦金付与・夜間の画外外出禁止などを規定し、戸長・用係が管理することとなった。『平成市史 通史編3』を参照したもの。
 - 23 同上、2011、p.69
 - 24 同上、2011、p.69 『平成市史 通史編3』を参照したもの。
 - 25 同上、2011、p.81 『新潟花かがみ』は、上巻には当時の古町美技25名の錦絵を載せ、下巻にはその評判記を対照させている。著者は金子錦二。
 - 26 同上、2011、p.71
 - 27 同上、2011、p.74~75 古町通四番町から出火し、多くの被害を出した西堀前通五番町内(脱奔小路)の妓楼は全焼した。貸座敷全てが焼却した西堀前通前五番町と古町通五番町を貸座敷営業許可区域から除外。さらに、火事の被害がなかった古町通七番町、西堀前通六、七番町の3つも除外された。貸座敷の軒数も、古町通六番町、古町通八、九番町、西堀前通八、九番町、南、北毘沙門町は現存数のみの所有で増設を禁止した。一方、北辺の遊郭予定地である横七番町以北の営業許可区域を広げ、その区域では制限なしで貸座敷の開設を認めた。この布達により、これまで西堀前通五番町(脱奔小路)で営業していた何軒かが遊郭予定地に移った。
 - 28 同上、2011、p.75 住吉町で起きた火事が南毘沙門町に延焼したことをきっかけに、南、北毘沙門町も営業許可区域から除外された。
 - 29 同上、2011、p.76 明治26年(1893)8月14日、新潟最大の遊郭であった古町通八、九番町と西堀前八、九番町の妓楼がほとんど焼失した。県は、同所で営業を継続したい楼主に対し5年の猶予期間を与えた。さらに、たび重なる火事での類焼を免れてきた古町通六番町、八番町、本町通十三番町、旧横七番町南側にある合計17戸に対しても上記と同じ5年間の猶予期間が与えられた。
 - 30 同上、2011、p.77 本町十四番町から出火し十四番町の貸座敷はすべて全焼した。新しい「新潟遊郭」付近の場所に位置しており、「新潟遊郭」の体裁が整い始めた直後であったため相当な痛手であった。十四番町の楼主たちは隣接地への集団移転をし、その新設地を常盤町と仮称し、6月には営業を再開した。これが「常盤町遊郭」の誕生である。十四番町は、常盤町に移った楼主たちの努力があり妓楼の穴埋めが捗ったため、焼失前のような街並みを取り戻すことができた。
 - 31 前掲書3に同上、2011、p.74~75
 - 32 同上、2011、p.77
 - 33 小谷野敦『日本売春史 遊行女婦からソープランドまで』p.152
 - 34 前掲書3に同上、2011、p.146 垂花街は市の中心部(古町)からは、日本一長い木橋(当時長さ約782メートル)と謳われた萬代橋を渡らなければ行けず、地理的条件の悪い花街であった。しかし、大正6年(1917)、竜ヶ島地先(万代島フェリーターミナル付近)への新港の築港工事が始まり、最新機器や技術など当時の最先端を駆使しての取りかかり

振興に燃える土地柄の花街であった。年を追っての繁栄は度を増し、芸事にも熱心であった。

- 35 同上、2011、p.146
- 36 同上、2011、p.147~162
- 37 同上、2011、p.162~164 藤間静枝は、元は古町花街の売れっ娘であった庄内屋八重である。彼女が19歳で上京をし、藤間流の一人前となつての新潟劇場での帰郷公演がこの公演である。
- 38 同上、2011、p.164~166 全国料理飲食店業同盟会の新潟大会が決まった時点で、同盟会幹事店である鍋茶屋・行形亭から市内三花街（古町・沼垂・下町）の代表に協力の依頼があつた。この大会で最も盛り上がったのは2日目であつた。本会議（古町通9番町の大勝館にて）の終了後には藤間連の舞踊があり、園遊会の会場である行形亭までの移動には、先頭に古手舞に扮装した古町芸妓数人、次に揚屋台に500の会員と三花街の芸妓400名が続き、古町通を練り歩いた。園遊会は400名の芸妓たちにより真に華やかであり、芸妓たちの活躍は見事であつたとされている。さらに、この大会を記念して古町芸妓307名の写真を載せた写真集『風流万千花かがみ』が大会初日に発行され盛況な売り上げであつた。
- 39 同上、2011、p.173~174
- 40 同上、2011、p.175
- 41 同上、2011、p.182
- 42 同上、2011、p.230
- 43 同上、2011、p.237
- 44 同上、2011、p.238
- 45 同上、2011、p.239 各業者の組合別または地域別ごとに約2週間程度の集団錬成を行つたうえ、軍事工場などへ振り向けて生産業務に従事した。
- 46 同上、2011、p.241~247
- 47 同上、2011、p.248~249
- 48 同上、2011、p.248~251
- 49 ここで言う振袖は、16歳以上の若手の芸妓（18歳となると一本となる）
- 50 前掲書3に同上、2011、p.250~251
- 51 同上、2011、p.253
- 52 同上、2011、p.69
- 53 同上、2011、p.113~114
- 54 平山敏雄『新潟芸妓の世界』p.164
- 55 待ち合わせや会合のための場所を提供する貸席業のこと。芸妓との遊興や飲食を目的として利用された。
- 56 前掲書3に同上、2011、p.25
- 57 同上、2011、p.25
- 58 同上、2011、p.54
- 59 平山敏雄『新潟芸妓の世界』p.65
- 60 前掲書3に同上、2011、p.258~259
- 61 同上、2011、p.259
- 62 ここで言う振袖さんは、18歳以上の若手芸妓
- 63 振袖を務め上げた一人前の芸妓（何歳になつたらという制限はない）
- 64 鬘ではなく地毛で髪を結び、白塗りをせずにお座敷に入る地方および立方。40歳前後が目安。
- 65 前掲書3に同上、2011、p.260

文献目録

江原由美子『性の商品化 フェミニズムの主張2』頸草書房 1995

風間正太郎『新潟遊女考』高志書院 1999

木村一貫編『新潟美人』新潟市歴史博物館 2011

小谷野敦『日本売春史 遊行女婦からソーブランドまで』新潮選書 2007

佐賀朝/吉田伸之編『シリーズ遊郭社会1 三都と地方都市』吉川弘文館 2013
女性史総合研究会編『日本女性史3 近世』東京大学出版 1990
女性史総合研究会編『日本女性生活史3 近世』東京大学出版 1990
女性史総合研究会編『日本女性生活史4 近代』東京大学出版 1990
中野進『新潟日報夕刊「晴雨計」より 世界・にいがた旅エッセー 旅する心 街づくりへの想い』新潟日报社(私家版) 2007
新潟県編『新潟県史・通史編3 近世1』新潟県 1987
新潟県編『新潟県史・通史編4 近世2』新潟県 1988
新潟県編『新潟県史・通史編6 近代1』新潟県 1987
新潟県編『新潟県史・通史編7 近代2』新潟県 1988
新潟県編『新潟県史・通史編8 近代3』新潟県 1988
新潟市編『新潟湊の繁栄 湊とともに生きた町・人』新潟日報事業社 2011
新潟市『新潟歴史双書Ⅰ 新潟湊の繁栄』新潟市1998
新潟市郷土資料館編『初代新潟奉行 川村修就』新潟市歴史博物館1997
新潟市郷土資料館編『新潟湊130年のあゆみ』新潟市歴史博物館1999
新潟市歴史博物館編『新潟市歴史博物館総合ガイドブック』新潟市歴史博物館 2004
新潟女性史クラブ編『写真記録 にいがたの女性史』郷土出版社 1994
新潟女性史クラブ編『光と風、野につむぐ一連譜 新聞に見る新潟女性史年表』野鳥出版 2001
平山敏雄『新潟芸妓の世界』新潟日報事業社出版部 1973
藤目ゆき『性の歴史学』不二出版 1999
藤村誠/岩崎久太編『港町新潟古町芸妓』株式会社 第一印刷所 2009
藤村誠『新潟の花街 古町芸妓物語』新潟日報事業社 2011
三浦哲郎『小説集 しづ女の生涯』実業之日本社 1979
森崎和江『からゆきさん』朝日新聞社 1978
脇田春子/S・B・ハンレー『ジェンダーの日本史 上』東京大学出版会 1994
渡辺憲司監修『Gakken Mook CARTAシリーズ 吉原遊女のすべて』学研パブリッシング 2013

映像資料

『謎解き! 江戸のススめ「花街と遊女」』2012/12/03放送
『歴史秘話ヒストリア「花魁」の真実〜江戸・吉原遊郭の光と影〜』2013/01/21放送
『北前船の海道をゆく 新潟湊 大河で栄えた北前航路最大の商都』2013/03/24放送
『謎解き! 江戸のススめ「江戸の宿場町」』2013/05/13放送

URL

「柳都振興」 <http://www.ryuto-shinko.co.jp/info/index.html> (2013/12/13)

フィールドワーク協力者

中野進さん 昭和6年11月30日生まれ 柳都振興株式会社社長 新潟市中央区在住
一森政子さん 昭和43年11月6日生まれ 柳都振興株式会社事務局 新潟市中央区在住
扇弥さん(本名:松島ひろさん) 昭和16年10月26日生まれ 芸妓 新潟市中央区在住
棚橋幸さん 昭和42年10月31日生まれ 柳都振興株式会社取締役 新潟市東区在住
あおいさん 昭和61年11月14日生まれ 柳都振興株式会社 新潟市東区在住
初音さん 平成2年12月19日生まれ 柳都振興株式会社 新潟市南区在住

(卒業論文指導教員 神田より子)